上北農業普及振興室 令和５年７月 21 日発行
【問合せ先】0176-23-4281（作物・畜産班）

だ い ず 通 信　令和５年 第３号

中耕培土は、落花や根腐病の発生を防止するため
開花前の７月 25 日までに作業を完了しましょう。
連作が続くとマメシンクイガの被害が発生しやすくなります。
できるだけ残効性の長い殺虫剤を使用し、適期散布に努めましょう。

１　生育状況

・期間をとおして気温が高く、作業は順調に進んだ。
・出芽揃いが良く順調に生育しており、湿害等の発生はみられない。
・７月 18 日巡回時の生育観測ほの葉数は、６月上旬は種で８～９葉期、６月下旬は種（晩播狭畦栽培）で２～３葉期である。

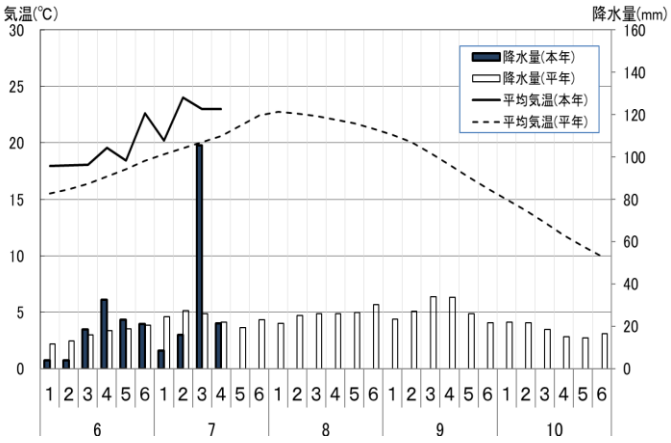

図-１　平均気温と降水量

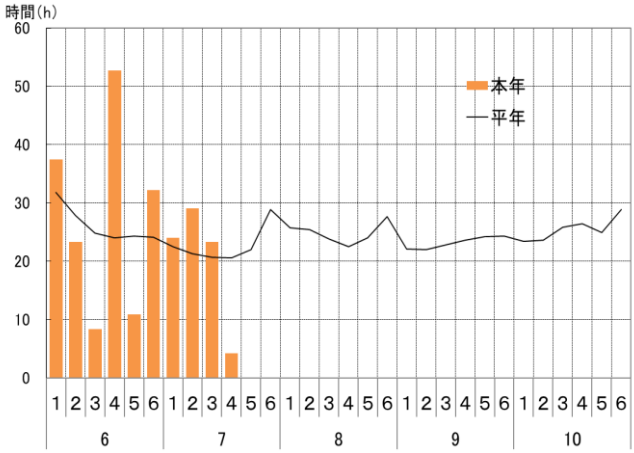

図-２　日照時間

表-1　生育状況調査結果

地点名	年度	生育ステージ は種期	出芽期	開花期	成熟期	出芽本数 (本/㎡)	7月10日 草丈 (cm)	葉数 (枚)
県生観 十和田市 下切田	本年	6月5日	6月12日			13.9	53.2	7.0
	平年	6月7日	6月15日	8月4日	10月17日	13.8	30.1	－
	差・比	早2日	早3日			96	176	－
地区生観 十和田市 赤沼	本年	5月25日	6月2日			16.1	47.4	7.9
	平年	6月1日	6月10日	7月30日	10月12日	17.4	37.1	－
	差・比	早6日	早8日			88	128	－
晩播狭畦 七戸町	本年	6月30日	7月8日			27.3	26.0	2.9
	平年	6月25日	7月2日	8月10日	10月19日	27.6	11.7	0.7
	差・比	遅5日	遅5日			99	222	－

※晩播狭畦栽培の本年値は7月20日時点

図-3 生育観測ほの生育(7/18 撮影)

２　中耕・培土作業のポイント

・コンバイン収穫時の汚損粒の発生を抑えるため、培土高は均一になるように行う。
・やむを得ず培土作業が１回しか行えない場合は、培土作業を除草剤散布におきかえ、確実に雑草を抑える。
・開花期以降の作業は、大豆の根を傷つけ、落花や土壌病害の発生を助長するため、開花が始まる７月 25 日までに作業を完了する。

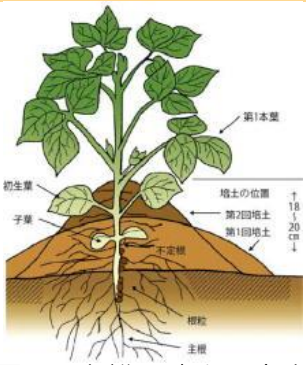

図-4 中耕・培土の高さ

３　食葉性害虫の防除　※必要に応じて

・ウコンノメイガ等食葉性害虫の発生量が多い場合は、７月下旬から８月上旬に薬剤散布により防除する。ウコンノメイガの防除は、７月下旬～８月上旬時点で大豆１本あたりの被害葉(葉巻数)が３葉以上の発生を目安に行う。

表-２（参考）食葉性害虫の防除薬剤

薬剤名	適用害虫		希釈倍数	使用回数	備考
	ｳｺﾝﾉﾒｲｶﾞ	その他			
フェニックスフロアブル	○	ﾂﾒｸｻｶﾞ	4000倍	３回以内	
スミチオン乳剤	○	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類	1000倍	４回以内	マメシンクイガ防除で使用予定の薬剤は、成分の使用回数に注意する。
			８倍を0.8ℓ 無人航空機散布		
トレボン乳剤	○	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類 ﾂﾒｸｻｶﾞ	1000倍	２回以内	
アディオン乳剤	○	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類 ﾂﾒｸｻｶﾞ	3000倍	３回以内	
プレバソンフロアブル５	○	ｵｵﾀﾊﾞｺｶﾞ	4000倍	２回以内	
			16～32倍を0.8ℓ 無人航空機散布		

技術情報　－ マメシンクイガの効果的な防除 －

・マメシンクイガに対する薬剤防除の対象は、莢内へ侵入し子実を食害する**幼虫**が主体となる。**防除適期は成虫の産卵盛期から幼虫の孵化盛期**である（図４）。

・**上北地域の平年の防除適期は８月下旬から９月上旬頃**である。

表-３　マメシンクイガの薬剤散布例

	時　期	マメシンクイガ薬剤	紫斑病薬剤
１回目	８月 25 日頃	アディオン乳剤	プランダム乳剤 25
２回目	１回目防除の７～10 日後	プレバソンフロアブル５	ファンタジスタフロアブル

・前年が大豆以外の作物の場合は、８月第６半旬から９月第１半旬の１回散布でも防除可能な場合が多いが、連作の場合は原則２回防除とする。

・残効性の長い薬剤には、プレバソンフロアブル５、アディオン乳剤、グレーシア乳剤等がある。スミチオン乳剤は残効性が短いため、可能な限り使用しない。

・また、近年はカメムシによる**しいな**の発生が増加しているため、マメシンクイガの１回目の薬剤散布時にカメムシにも登録のある薬剤を使用するのが望ましい。

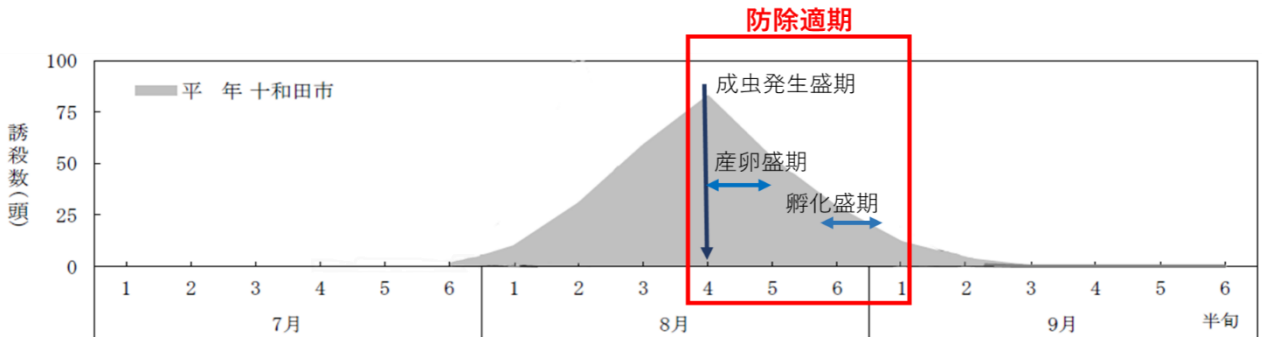

図-５ フェロモントラップによるマメシンクイガの成虫誘殺数からみる上北地域の防除適期